

体育学科スキー実習と学友会スキーの学生評価(1) — 動機・期待・満足感の比較 —

中村 哲士, 野老 稔, 中西 匠, 會田 宏, 水田 英男*

(武庫川女子大学文学部教育学科体育専攻)

(*武庫川女子大学文学部人間関係学科)

The Student Evaluation in subject-type and non-subject-type Ski Practice(1) — The Comparison of the Motive, the Expectations and the Satisfactory Sense —

Tetsushi Nakamura, Minoru Tokoro, Takumi Nakanishi,
Hiroshi Aida, Hideo Mizuta*

Physical Education Major,

Department of Education, School of Letters

Mukogawa Women's University, Nishinomiya 663-8558, Japan

**Department of Human Relations, School of Letters*

Mukogawa Women's University, Nishinomiya 663-8558, Japan

Abstract

This paper is the first report of the comparative study on subject-type and non-subject-type ski practice. The purpose of this study was to investigate the evaluation of students, who participated in a ski intensive course as a practice in the curriculum of the department of Physical education(subject-type ski practice). This evaluation was compared with that of participants in a ski intensive course as a service program of the student's association(non-subject-type ski practice).

The results were summarized as follows:

1. In the ski experience and the preliminary learning quantity, there was no difference in both groups before participating in each practice.
2. The improvement of the ski skill was the major motive and expectations of the participants in subject-type ski practice. On the other hand, it was the human alternating current through the sport in non-subject-type ski practice.
3. It was found in both practices that the will, which continues a ski, is proportional to the comprehensive satisfaction of participating in a practice. Some improvements were pointed out to both practices.

緒言

本研究は、島田ら¹⁾野老ら²⁾會田ら³⁾中西ら⁴⁾によって行われた本学文学部教育学科体育専攻ならびに短期大学部体育学科(以下体育学科)の学外実習科目「スキー」(以下スキー実習)の臨床教育学的研究を受けて行われる第一報である。

島田ら¹⁾野老ら²⁾會田ら³⁾中西ら⁴⁾の一連の研究は、その根本目的を1)教育研究所と学内の各部局との連携研究を推進し、学内の教育研究を活性化する、2)できるだけ多くの教師の参加を得ることで、学際的研究や臨床教育学的研究を推進する、3)結果として大学教育の質的向上を図る、などの点とし、大学評価や授業評価が盛んに行われる近年の大学教育界の実状を踏まえた上で実施された。加えて、研究対象にスキー実習が選ばれた理由を要約すると、①積極的な授業改革科目、②開講時期・期間の特殊性、③野外実習がもつ総合科目的要素、④学科全教員の役割分担、⑤臨床教育学的研究の実施、⑥第三者的立場からの観察が可能、の6点⁵⁾があげられ、新しい教育方法実施の可能性にも言及しようとする研究の立場がうかがわれた。

それぞれの研究においては、学生参加の動機や目的、教師・学生の相互評価、プログラミングやマネジメントのあり方、コーディネーターの必要性、実地・講義講習のあり方、教師像や教師・学生間のコミュニケーション、新しい指導方法の導入、などの各方向から分析が行なわれ、今後のスキー実習のあり方について詳細な提言がなされている。しかし、評価や分析を行なったのは、あくまで本学体育学科教師と本学体育学科学生であり、唯一第三者的立場から検討を加えたのは本学教育研究所所属の島田だけであった。ゆえに、一連の研究スタッフから発言された疑問は、スキー実習が授業であることや体育学科単独の実習であることから、学科内部だけの甘口な評価に過ぎないのではないかという点であり、対照となる集団との比較検討が必要視された。

本学には、学生が自主的に運営する学友会運動部委員会主催「学友会スキー」という、教師が引率・指導を担当し実習形態で実施されるスキー研修(以下学友会スキー、詳細後述)が存在している。この学友会スキーは、形式上スキー実習と酷似しているが授業とは無関係で、参加申し込みについても本学全学生が自由意志で行なえる非科目型スキー実習である。上述した疑問を解消するための対象としては、大変好都合な実習と言える。幸いにも、本研究者が1997年度学友会スキーの教師側担当者であったため、一連の研究スタッフの意向を学友会スキーの総括者である学生部長に伝えたところ、スキー実習研究の対照群として、学友会スキー参加者に対する調査実施の許可がいただけた。このことは、これまでの研究の妥当性を検証できることのみならず、一連の研究の根本目的がより一層拡充した形で具現化したものと評価された。

一連の研究は、その根本的目的を同一にしつつも、各研究者により分担され、それぞれにスタンスの違いが生じている。また、単独学科によるスキー実習と全学対象の学友会スキーの間には、規模やスタッフ、内容などにも違いがある。これまでの研究で分析対象とされた部分全てを、検証の対象とすることは非常に困難である。よって、スキー実習と学友会スキーの両者に共通する部分を抽出し、比較検討することとした。すなわち、第一報は、島田ら¹⁾野老ら²⁾の研究で明らかにされた動機・期待・総体的満足度などを中心とする比較研究とし、第二報は、會田ら³⁾が明らかにした満足感を構成する因子について比較研究することとした。

従って、第一報では、何に触発され、いかに行動し、どれだけの満足感がえられたのかなどの総体的評価を、学友会スキー側を対照群に置いて、これまでのスキー実習研究の真価を検証することを命題とした。

方 法

1. 分析の対象と各実習の概要

(1) スキー実習

対象は、1997年2月23日(日)～3月1日(土)に、長野県志賀高原高天ヶ原スキー場で開講されたスキー実習に参加した武庫川女子大学文学部教育学科体育専攻及び短期大学部体育学科の学生170名であった。所属別参加学生の内訳は、大学体育専攻2年生が72名、短大体育学科1年生が98名であった。

概要については、スキー実習が授業であり、また、これまでの研究対象とされてきたため、本学平成8年度開講科目要項⁶⁾⁷⁾ならびに島田ら¹⁾の研究を参照されたい。

(2) 学友会スキー

対象は、1998年3月2日(月)～3月6日(金)に、長野県志賀高原発哺温泉スキー場で開催された学友会スキーに参加した武庫川女子大学及び短期大学部の学生52名であった。所属別参加学生の内訳は、大

学が、文学部国文学科2名、文学部英米文学科1名、文学部教育学科体育専攻5名、文学部人間関係学科1名、生活環境学部食物栄養学科3名、薬学部8名の計20名、短期大学部が、国文学科9名、英語学科2名、児童教育学科6名、体育学科6名、人間関係学科5名、生活造形学科4名の計32名であった。

学友会スキーは、スキー技術の習得に加え、教師と学生あるいは学部学科を超えての人間交流、学生時代の思い出づくりなどを目的に、学友会運動部委員会の学生委員が企画、立案、運営の全てを担当し、年1回毎年実施されている学友会行事である。行事参加者は、当該年度の場合、指導スタッフ側が、文学部英米文学科・文学部教育学科・生活環境学部・薬学部から選出されたスキー指導歴を有する教師10名、運動部委員会委員10名で構成され、受講者側は、本学全学生に対し公募され、参加申し込みを行った学生であった。例年、引率および実地講習の指導は教師が担当し、講習の補佐および行事全般の運営を運動部委員会学生委員が担当している。

事前指導は、行事の約3ヶ月前から実施され、説明会、公募、第1回参加申し込み、第2回参加申し込み、要項の受け渡し、直前の説明会を、運動部委員会顧問教師と運動部委員会委員によって順を追って行なわれた。

行事の日程・日課は、第1日が移動、第2・3・4日が実地講習・学習講義・班別ミーティング・親睦会、第5日が移動を中心に企画された。

一日の滑走時間は、スキーの技術レベルや経験によって班や担当教師が決定され、午前9時から11時30分と午後1時から3時30分までを講習とし、午後3時30分から5時までが自由研修とされている。

2. 調査の内容と方法

(1) スキー実習

島田ら¹⁾野老ら²⁾の研究で使用された調査結果を採用した。

(2) 学友会スキー

島田ら¹⁾野老ら²⁾の研究で使用された調査票をもとに本研究者が学友会スキー用に再構成した「平成9年度学友会スキーに関する調査」と、運動部委員会が参加者の意見聴取として例年行っている「学友会スキーアンケート」を、第4日の夕食後に集合調査方法を用い無記名方式で実施した。

3. 分析の内容と方法

満足感や充実感を構成する因子を詳細に探ろうとする作業は、會田ら³⁾との比較研究に譲るとして、今回は、参加理由、参加に際しての期待、事前学習量、経験、技術、総体的満足度について、野老ら²⁾の研究と比較することとした。

実際の比較検討に用いた有効回答調査票は、スキー実習が170票中169票(99.41%)、学友会スキーが52票中52票(100.00%)であった。

結果と考察

1. 経験と事前学習

何事においても、事前に調べたり、学習したり、体験したり、経験を重ねたりすることは、参加に際しての期待や満足感を増減させる要因となることであろう。スキー実習研究では、その点について学内における事前指導にとどまることなく、学外における個人的な範囲にまで広げて質問が行われている。体育学科の学生は運動・スポーツを得意とする集団である。となれば、スキーにおいても特殊な集団といえるのであろうか。学習量、経験量、技術について比較を試みた。

参加申し込み以前のスキー経験について、特にその時点におけるスキーの技術レベルを比較したのがTable 1.である。

スキー実習参加者のほうが、やや経験豊富な傾向を示している様子がうかがえるが、学友会スキー参加者との間の各比率には、有意な差は認められなかった。

スキーは、近年、中学校・高等学校の修学旅行のみならず、ファミリーや友人と安易に楽しむ事ができるようになってきている。本学においても、学科の如何を問わず、約7割の学生が実習参加申し込み以前に初歩的なスキーの経験はしていると判断される。つまり、実習前のスキー経験に関しては、体育学科学

生が特殊な集団であるとは捉えられないということである。

Table 1. 参加前のスキー技術レベル (%)

項 目	スキー実習 (N=169)	学友会スキー (N= 52)	P
1. 初心者	27.22	34.62	
2. プルークボーゲンができる	37.87	44.23	
3. シュテムターン以上ができる	34.91	21.15	

* : $P < 0.05$ ** : $P < 0.01$ *** : $P < 0.001$

実習参加直前までに、なんらかの個人的学習をしたかという問いに対する回答を、Table 2. に示した。

Table 2. 参加に際しての事前学習 (%)

項 目	スキー実習 (N=169)	学友会スキー (N= 52)	P
1. 指導員の指導を受けた	8.88	3.85	
2. 上手な人の指導を受けた	10.06	1.92	
3. テキストやビデオ等で学習した	5.92	32.69	***

* : $P < 0.05$ ** : $P < 0.01$ *** : $P < 0.001$

他者からの指導を受けたと回答した者が、スキー実習参加者にやや多い傾向がうかがえるが、有意な差は認められなかった。逆に、テキスト等で学習した者の割合は、圧倒的に学友会スキー参加者のほうが高く、有意な差が認められた。

どのような内容のものをテキストと呼んだのか、どの程度学習や指導を受けたのかなどは、質・量が計れなかったため一概には言えない。ただ、体育学科学生には、情報や知識よりも実体験を重んじる傾向と、今回の実習が授業であったことから現場で学べばよいとする傾向が、また、学友会スキー参加者では、実習形態の行事参加経験が少なく、見知らぬ人との共同生活も絡むことから、不安解消のため予備的学習があったのではないかと推察される部分は残る。

従って、本項におけるスキー経験量と事前学習量の比較分析では、実習参加直前までの両集団に、大きな差はなかったと判断する。

2. 参加理由と期待

スキー実習が授業とはいえ、体育学科学生は、大学生と短大学校体育コースの学生が3実習(水泳、スキー、キャンプ)の内1実習を、短大社会体育コースの学生が3実習の内2実習を選択履修すればよい。であるにもかかわらず、なぜ、例年多数の学生が参加申し込みを行っているのでしょうか。確かに、単位修得や指導者への準備、他実習との比較などは、体育学科学生として重要な参加理由となるであろう。しかし、学友会スキーは授業ではなく、この点が計れない。従って、純粋な心理的部分のみを抽出して、参加の理由と期待について比較した。

Table 3. に参加しようと思った理由を示した。

スキーが好きだという項目で、スキー実習参加者が学友会スキー参加者を有意に上回った。また、有意差は認められなかったが、友達と行きたいという項目に、学友会スキー参加者の半数以上が回答した。

スキー実習参加者は、スキー自体を楽しみたいとする直接的動機によって、逆に、学友会スキー参加者は、スキーというスポーツを介した人的交流によってその期間を楽しみたいという動機によって、参加の意志決定をする傾向にあるのではないかと推考する。

Table 3. 参加の理由 (％)

項 目	スキー実習 (N=169)	学友会スキー (N= 52)	P
1. スキーが好きだから	53.25	26.92	***
2. 友達と行きたかったから	39.64	53.85	
3. スキーをしたことがないから	23.08	25.00	

* : $P < 0.05$ ** : $P < 0.01$ *** : $P < 0.001$

そこで、参加の意志決定を行った後、どんなことを実習に期待したかをたずね、比較した結果を Table 4. に示した。

Table 4. 実習への期待 (％)

項 目	スキー実習 (N=169)	学友会スキー (N= 52)	P
1. スキーの技術習得	96.45	55.77	***
2. スキーの楽しさを体験	67.46	73.08	
3. 思い出づくり	42.60	50.00	
4. 友達との人間的交流	34.91	36.54	
5. 雪山体験	15.38	5.77	

* : $P < 0.05$ ** : $P < 0.01$ *** : $P < 0.001$

スキー技術の習得に関して、スキー実習参加者が有意な差をもって圧倒的に高い回答率を示している。有意な差は見られないが、楽しみの体験や思い出づくり、友達との人間関係づくりの3項目は、学友会スキー参加者の回答率のほうが上回っていた。

スキー実習参加者も、楽しみ、人間関係、思い出の各項目の回答率が著しく低いわけではない。しかし、技術習得に対する期待があまりにも高く、スキーの楽しみは技術習得にあり、技術の獲得は実習の最大の目的であるという強い意識が感じられた。

この項においては、科目型と非科目型の違いが生じてきたものと推察される。スキー実習では、実習の目的のみにとどまらない個人的目標設定の高さが、学友会スキーでは、その機会を楽しもうとする気楽さが強く感じられた。

3. 満足度と継続意志

両実習間に参加者の求めるものの違いが生じていることがわかった。では、参加者は実習からどの程度の満足感を得ることができたのであろうか。質問項目を満足傾向と不満足傾向の2つに再カテゴリー化し、比較すると、スキー実習が169名中159名(94.08%)が、学友会スキーでは52名中52名(100.00%)が満足傾向を示し、両者間に有意な差は認められなかった。

両実習とも満足度は比較的高く、ある程度参加者の期待に答えられる実習であったことは評価されると考えられるが、程度の問題と、何によって満足感が得られたのかの問題については解消されない。そこで、満足傾向を再度カテゴリー化し直した結果を Table 5. に、そして、どの体験から最も多くのエンジョイ⁸⁾感を得られたのかの比較を Table 6. に示した。

Table 5. において、高次の満足傾向は、スキー実習が有意に高いことがわかる。また、Table 6. においては、スキー実習参加者のほうが「スキー技術の向上」と「スキーにハマった⁹⁾」の質問項目で明らかに高い回答率を示していることがわかる。

Table 5. 実習終了時の満足度 (%)

項 目	スキー実習 (N=169)	学友会スキー (N= 52)	P
1. 高次の満足感	71.01	46.15	**
2. 通常の満足感	23.08	53.85	***
3. 不満的傾向	5.92	0.00	

* : P<0.05 ** : P<0.01 *** : P<0.001

Table 6. エンジョイ感を得られた体験 (%)

項 目	スキー実習 (N=169)	学友会スキー (N= 52)	P
1. スキー技術の向上	94.67	76.92	***
2. 仲間とのコミュニケーション	66.27	53.85	
3. スキーにハマった	51.48	32.69	*
4. 教師とのコミュニケーション	42.60	50.00	
5. 日常生活からの解放	30.18	26.92	
6. 仲間との集団生活	22.49	28.85	
7. 野外体験学習	18.93	17.31	
8. エンジョイできたことは何もない	0.00	0.00	

* : P<0.05 ** : P<0.01 *** : P<0.001

これらの結果から、スキー実習参加者は、技術の向上を自らが確信し、よりスキーが好きになったことを実感して実習を終了していると推察され、学生評価からの期待と満足の一貫性に関する分析においては、スキー実習は総じて高い評価を得たものと判断する。また、学友会スキー参加者においても、技術向上に続き回答率が高かったのが教師や仲間とのコミュニケーションに関わる項目であり、当初の期待に背く結果ではなく、技術の向上に期待以上の効果があった結果、評価がやや変化したものと判断した。よって、満足感を向上させる第1次的要件は、スキー技術をいかに向上させるかに尽きると推考する。

この実習を契機にこれからもスキーを続けるかという継続意志については、スキー実習研究では具体的に質問されていない。そこで、自由記述の中から継続意志をあらわすであろう回答を取り上げ集計し、学友会スキーと比較した。

結果は、スキー実習においては、「よかった」、「上達した(したい)」、「これからも続けたい」、「指導者のおかげ」などの肯定的意見が160名(94.67%)で、「疲れる」、「うまくできない」、「思い出」などの否定的意見が9名(5.33%)であった。学友会スキーでは、「ぜひしたい」、「できればしたい」の肯定的意見が46名(88.46%)で、「どちらともいえない」という否定的意見が6名(11.54%)であった。両者間の回答率に有意な差は認められなかった。

継続意志については、学友会スキー側の「どちらともいえない」という反応をいかに解釈するかやや問題となるが、上述した満足感と比例関係にあることがうかがえる。

この項では、技術の向上が学生評価を変化させていることを指摘したい。満足感と継続意志が比例関係にあったことから、技術向上は満足感を刺激し、「できる」という自信を植え付け、継続意志へと反映していると推察した。スキー実習研究で取り組まれている満足感を構成する因子の抽出や、教師のFDの問題、新しい教授方法の検討などはすべて示唆されたものと判断する。

4. 両実習への要望

野老ら²⁾の研究で、学生からの要望において特に問題視された「教師について」、「班分けについて」、「ゲレンデ講習について」のうち、班分けとゲレンデ講習について比較検討したい。教師については、ス

スキー実習研究が現地インストラクターに起因した問題として捉えたため、教師全員が本学教員であった学友会スキーとの比較には用いなかった。

両実習ともに、まず、事前に自分自身のスキー技術や経験を自己申告し班が仮決定される。次いで、実習開始直前に、現地にて教師の見立てにより最終的な班が決定される。技術獲得進度などにより、班を途中移動する学生もないわけではないが、この点に関しては、両実習とも極力避けるよう現地における班分けは、慎重を期して行なわれている。

班分けに対する注文件数を比較すると、スキー実習が5件(2.96%)、学友会スキーが5件(9.62%)で有意な差($P < 0.05$)が認められ、スキー実習のほうが注文件数は少ない。スキー実習研究においては、授業であるため「指導者の指導法」や「学生の習熟度」の問題を重要視し、改善策を指摘している。しかし、学友会スキーでは、スキー実習と同様の問題に加え、その注文内容から参加時の仲間の問題が浮上してきている傾向がうかがえる。スキー実習も、学生の満足感ばかりに目をむけるばかりとは行かないであろうが、学生気質が変化しスキー実習を授業としてよりもスキー旅行として捉えるような学生が存在してくるようならば、この班構成員の問題もある方向から重視して行かなければならない要因と考える。

ゲレンデの講習に関わる注文は、そのほとんどが時間に関する問題であった。両実習ともに、講習時間は同一である。双方ともに長いと指摘する学生は存在せず、全学生が適切か短いと回答していた。また、講習時間外に設けられる自由滑走時間についても同様のことが言え、適切か短いとの回答が全数をしめた。

スキー技術の向上と人的な交流の2つの要件が満足感を向上させるのなら、参加者は班員や友人達と同様の技術向上を願い、また会話するであろう。技術的に追いつきたいであろうし、いっしょに滑ることを楽しみたいであろう。必然的に自己研修時間を求めてくるものと考えられる。野老ら²⁾が指摘するように、安全確保と要望の折り合いは、教師と学生の間意見調整から始めなければならないであろう。しかし、技術向上が満足感を向上させる第1要件と判明した以上、このような授業や授業形態で行われる実習の場合、教師の巡回指導などを適宜行いつつ、少時間なりとも1日1回の自由滑走時間を確保するよう努めるべきではないかと提案したい。

まとめ

本研究は、一連のスキー実習研究によって行われた体育学科スキー実習の臨床教育学的研究を受けて実施された。

一連のスキー実習研究において残された課題は、学科内部だけの評価に陥らないための他集団との比較検討の実施にあった。このことは、これまでの研究の妥当性を検証するにとどまらず、一連の研究の根本目的をより一層拡充・具現化して実施しようとする態度の現われであった。

比較研究は、スキー実習と学友会スキーの両者に共通する部分、すなわち、島田ら¹⁾野老ら²⁾の研究で明らかにされた動機・期待・総体的満足度などを中心として行なわれる部分と、會田ら³⁾が明らかにした満足感の構成因子を中心に行われる部分、の2つの視点を持つて行うものとした。

従って、今回は、動機、期待、触発、満足感などの総体的評価を、学友会スキー側を対照群に置き、これまでのスキー実習研究の真価を検証することを命題とし、第1報とした。結果から以下のことを指摘し、まとめとする。

1. 実習前のスキー経験に関しては、体育学科学生が特殊な集団であるとは捉えられなかった。また、事前学習量においても、体育学科学生からは、情報や知識よりも実体験を重んじる傾向と、今回の実習が授業であったことから現場で学べばよいとする傾向がうかがえ、どちらかと言えば学友会スキー参加者のほうが優っていた。よって、スキー経験量と事前学習量の比較分析では、実習参加直前までの両集団に大きな差はなかったと判断した。
2. スキー実習参加者は、スキー自体を楽しみたいとする直接的動機によって、逆に、学友会スキー参加者は、スキーというスポーツを介した人的交流によってその期間を楽しみたいという動機によって、参加の意志決定をする傾向にあると推測され、特に体育学科学生においては、スキーの楽しみは技術習得にあり、技術の獲得は実習の最大の目的であるという強い意識が感じられた。スキー実習では、

実習の目的のみにとどまらない個人的目標設定の高さが、学友会スキーでは、その機会を楽しもうとする気楽さが感じられた。

3. スキー実習参加者は、技術の向上を自らが確信し、よりスキーが好きになったことを実感して実習を終了していると推察され、学友会スキー参加者においても、技術の向上に期待以上の効果があった結果からか、評価に変化がもたらされていた。継続意志についても、満足感と比例関係にあることがうかがえ、技術向上が満足感を刺激し、「できる」という自信を植え付け、継続意志へと反映していると推察した。
4. 班分けとゲレンデ講習についてのみ比較検討を行った。班分けについては、スキー実習研究において指摘された「指導者の指導法」や「学生の習熟度」の問題に加え、学友会スキー側の注文内容に参加時の仲間の問題が浮上してきていたことから、今後のスキー実習も、班構成員の問題についてある方向から重視して行かなければならないと予測した。ゲレンデ講習については、スキー技術の向上と人的な交流の2つの要件が満足感を向上させるならば、参加者は必然的に自己研修時間を求めてくることが考えられ、教師側の工夫により、少時間なりとも自由滑走時間を確保するよう努めるべきと提案した。

文 献

- 1) 島田博司・三井正也・野老稔・徳家雅子・二宮恒夫，武庫川女子大学教育研究所レポート，**16**，187-246(1997)
- 2) 野老稔・島田博司・二宮恒夫・會田宏・中西匠・加村博，武庫川女子大学教育研究所レポート，**20**，11-90(1998)
- 3) 會田宏・中西匠・野老稔・二宮恒夫，武庫川女子大学紀要，**45**，49-55(1997)
- 4) 中西匠・會田宏・野老稔・塩満勝麿，武庫川女子大学紀要，**45**，73-82(1997)
- 5) 前掲1)，187-188(1997)
- 6) 武庫川女子大学文学部教育学科体育専攻，平成8年度開講科目要項，40(1996)
- 7) 武庫川女子大学短期大学部体育学科，平成8年度開講科目要項，13(1996)
- 8) 前掲2)，40(1998)
- 9) 前掲2)，40(1998)